

# 教職大学院における現職教員学生と学部新卒学生とが 共に学び合う授業の開発及び教育効果に関する研究

松岡 敬興

Research on the Development and the Education Effect of Lessons in which Incumbent Teacher  
Students and Faculty new Graduate Students Collaborate

MATSUOKA Yoshiki  
(Received January 5, 2017)

キーワード：教員養成高度化、授業開発、協働、同僚性、現職教員学生、学部新卒学生

## はじめに

本研究では、教職大学院において現職教員学生と学部新卒学生とが共に学び、協働し合う授業を開発する。両者はそれぞれ学びに関するニーズや既存の知識理解及び経験値が異なることから、内容次第では別々に授業を展開する方が効果的であるが、その一方で、双方が共学しなければ見い出せない教育効果もある。それは現職教員学生による、同僚教員や若手教員を指導する力の育成である。同時に学部新卒学生は、先輩から専門性を学ぶことで同僚性のよさを実感する。

今回は「道徳の理論と実践」の授業に着目し、現職教員学生と学部新卒学生とが協働しながら授業開発に取り組む場面を設けた。ガイダンスの後、グループ（小学校教員、中学校教員）を約4名で編成し、①教材の選択、②授業づくり、③模擬授業の実践、④振り返り、⑤改善プランの作成及び発表、の流れに沿い、能動的な学び合いを展開した。

本取組の教育効果については、振り返りシートへの自由記述を中心に分析することによって、ねらいとしていた現職教員学生のスクールリーダーとしての資質力量、すなわち同僚との関係づくりや若手を育成する能力の高まりを読み取ることができた。意図的に全授業の一部（4コマ）において共に学び合う場面を設けることで、現職教員学生と学部新卒学生の双方が協働し合い、その役割を果たすことにより、同僚性の意義を学び取ることができた。

## 1. 「教育課程を展開するにふさわしい授業内容、授業方法・形態」とは

一般財団法人教員養成評価機構（以下、機構と記す）は、教職大学院の認証評価に関する評価基準を定めている。基準領域3-2に「教育課程を展開するにふさわしい授業内容、授業方法・形態が整備されていること」と記され、現職教員学生と学部新卒学生がお互いの特性を生かし協働しながら学び合いを進める取組や、現職教員学生と学部新卒学生の特性を配慮し区別した取組の必要性を強調している。

加治佐（2016）は、現職教員はストレートから何を学ぶかと題して、同僚との関係づくりや若手を育成する能力の重要性を指摘する。教職大学院では15コマの授業の内、2～3コマを一緒に行い、シラバスにも「指導力育成」や「メンタリング」といった内容が示されるなどの工夫が見られるとしている。

### 1-1 現職教員学生と学部新卒学生との学び合いがもたらすもの

現職教員学生と学部新卒学生はそれぞれ、授業に対して求める内容が異なる。キャリアを積みあげスクールリーダーをめざす現職教員学生と、教員としての資質能力の獲得や学校実習による教育実践を通じた学び

を希求する学部新卒学生とでは、明らかに様相が異なり、別々に授業を展開する方が効果的であるとも考えられる。確かに両者が同席し、授業展開において現職教員学生の経験値が優位に展開する場面が続くとしたら、学部新卒学生の学びへの興味関心を削ぐことになるだろう。

一方、両者が同席すればこそ教育効果が高まる授業内容、授業方法・形態についても考察が必要である。それぞれ授業に対して求める内容が異なるとしても、双方が互いを必要とする学習内容に注目したい。その一つとして、現職教員学生が若手教員を指導し、学部新卒学生が先輩教員から指導を受け共に授業づくりに取り組む学習内容があげられる。いわゆる模擬授業づくりとその実践及び振り返りが当てはまる。

双方が相手の存在を必要とする学習環境を用意し、ガイダンスを通して本取組の意図を理解することにより、能動的なグループ学習が始まる。両者が授業づくりという共通課題に対峙し、協働し合い、同僚性を体感しながら取り組むことで、本授業の到達目標へと近づくことができる。そのとき指導者（本授業担当者）は、学生同士の学びの状況を的確に把握しつつ、適宜、支援者として指導助言に努めることが肝要である。同時に学校において、教員にはチームとして課題に取り組もうとする姿勢はもとより、実践を通して考察を行い改善案を構築するなど、自己解決力が求められており、教員一人一人が主体的な学習者の一人であることへの認識を深めることが重要である。

### 1-2 教職大学院における取組の実例

機構の認証評価結果に基づき、各教職大学院における現職教員学生と学部新卒学生とが共に学び合う取組に着目する。以下の表1は、基準領域3の基準3-2「教育課程を展開するにふさわしい授業内容、授業方法・形態が整備されていること」について、研究課題に関連する記述内容があるものを整理したものである。

表1 認証評価結果（基準3-2）

No	教職大学院名	年	内 容
1	宮崎大学	24	<p>20名の専任教員（みなし専任教員3名を含む）を配置し、教職大学院の教育課程を適切に展開できている。全ての必修科目と多くの選択科目が研究者教員と実務家教員の協力教授方式で開講されており、授業方法においても講義形式をはじめ事例研究、グループ討論、プレゼンテーションなどの多様な形態を計画的に組み込んでいる。</p> <p>共通必修科目を含めて大半の科目で、現職教員学生と学部新卒学生の混合授業が基本となっているが、多くの授業では共通・学生区分別の到達目標を設けて、学生の経歴に配慮した学習保証の工夫がなされている。また、授業科目において現職教員学生と学部新卒学生の意図的な学び合いの機会も積極的に組み込まれ、学習効果の向上が図られている。一部科目では、内容に応じて両者を分離して授業やグループ討議を実施することも取り入れており、学生のニーズ等を踏まえた学習集団の弾力化の工夫がなされている。</p>
2	東京学芸大学	24	<p>18人のうち10人が実務家教員であり、理論と実践のバランスがとれた構成になっている。またさまざまな領域の研究者や実践家を特別講師として招聘し、教育の充実につながっている。</p> <p>授業においては講義以外に、グループワークやロールプレイングなど多様な方法が活用されている。さらに学部新卒学生と現職教員学生がほぼ同人数であることから、両者の長を互いに生かし合うグループワークやメンター制が可能になり、両者が互いに学びあう好ましい関係性のもとで、教育活動が展開されている。</p> <p>課題研究では、個別指導に加えて、月に1回、研究テーマの近い学生を研究者教員・実務家教員が指導するグループ検討会が開催され、理論と実践を結びつける場として有効に機能している。また詳細な『課題研究ハンドブック』が作成され、研究を進めるうえでの指針として活用されている。</p> <p>学生にとっては実習や課題研究が、理論と実践をつなぐ機会として捉えられる傾向が強い。これら以外の授業においても理論と実践の融合が実現されるよう、さらなる工夫が求められる。</p> <p>また教育研究のフィールドを充実させるために、修了者のネットワークを組織化し、所属校と教職大学院間のつながりを維持することが期待される。</p>
3	岡山大学	24	<p>研究者教員と実務家教員の協働の下、学部新卒学生と現職教員学生それぞれの学習履歴、実務経験等を配慮し、事例研究や模擬授業といったワークショップ型授業を中核にした授業方法・形態が展開されている。共通科目では、学部新卒学生と現職教員学生が共に同じ授業を受け、現職教員学生はメンターとしての役割を果たし、豊かな経験を基に、より現実的な観点から、学部新卒学生は理論・理念・理想的観点から意見を出し合い、双方向の視点で理論と実践の関係性を省察している。</p>

4	聖徳大学	25	<p>教職大学院全体としての課題に専門的に対応できる教員と、各コースの内容に精通した教員を配置し、1科目に2名以上の教員が担当することを原則としている。また、2つのコースに対応して、授業では幼児期と児童期の発達を連続的に理解することや<u>学生同士が協働的に学び合うこと</u>によって同僚性を<u>培う</u>ことを重視した授業内容・形態になっている。</p>
5	山梨大学	25	<p>教員数については、学生数に適った教員を配置しており、個々の科目についても担当する授業科目に対する業績や実務経験についても十分に検討して配置がなされている。また、全ての科目において複数教員によるチーム・ティーチングにより授業が行われており、そのほとんどが研究者教員と実務家教員によるもので、理論と実践の融合を図ることに役立っているといえる。</p> <p>授業方法・形態については、全て科目において学部新卒学生・現職教員学生の協働学習により進められており、<u>そこで多く取り入れられているグループワークなどにより互いの持ち味を生かし刺激し合える授業</u>となっている。授業の終わりには、OPP（1枚ポートフォリオ）によるリフレクションが位置づけられているが、これは毎時の学生と教員の対話に役立つほか、2年間の学びの軌跡を明らかにし、積極的な省察を促すものとなっている。</p>
6	福井大学	27	<p>「協働実践研究プロジェクト」は、拠点校の学校課題と現実即した実践演習・事例研究を中心に進められ、<u>カンファレンスで、学部新卒学生及び現職教員学生が、教員・他領域の専門家などとともに、省察を語り</u>と傾聴を重層的に繰り返す中で、視野を広げながら実践の理論化を図って展開されている。</p> <p>「学校拠点」の授業の指導には、教員がチームを組んで学校に向いている。しかし、それぞれの科目において、細部の分担や協働に柔軟性を持たせる反面、シラバスが明確になっていない部分が見受けられる。また、学部新卒学生の中には、長期のインターンシップと現場の教員によるメンタリングや振り返りだけでは、自らの基本的な授業技術や教材研究について不安を抱く者も見受けられ、細やかな基礎的個別指導が必要な可能性が見出される。また、夏期休業中に取り組む理論書の示す内容と実践との関連づけに自信が持てない事例や、実践の中からの理論化について困難を感じる事例が訪問調査において見受けられた。</p> <p>現職教員学生の「学校拠点」の授業時数及び学修状況は、毎週実施される専攻会議等で管理され、学校における勤務と学習の区別についても、学校長との協議により実習時間を明確にする努力がされている。</p> <p>基本的には拠点校の教育実践に日常的に参加し、週間カンファレンス（週1回）や月間カンファレンス（月1回）の機会を設け、自己の振り返りと協働の振り返りを実施するなど、理論と実践の架橋を現実化するカリキュラム構成である。</p> <p>長期インターンシップにおける学部新卒学生の記述から、拠点校での学びにより教師という仕事の意識変化がおり、教師としての仕事の総体を学び、記録の価値に気づき、教師としての学び方を学び、生徒主体の授業観を構築し、子どもの世界をより深く理解できるように、成長している姿が見てとれる。</p> <p>ただし、学生の多様性をかんがみると、理論系科目の多くが集中講義の形態で開講され、拠点校における教育実践への関与という日常的な営みとそれを支える理論学習が時間的に連動していないため、関連性の理解のために個別的な支援も必要ではないかと思われる。</p>
7	兵庫教育大学	27	<p>教育課程を展開するにふさわしい授業内容や研究者教員と実務家教員による多様な授業方法（T・T方式による授業を重視、少人数授業等）・形態（<u>講義・問題解決討議法やケース・スタディ、ケースメソッド、ロールプレイ、ディベート等のアクティブラーニング</u>）が、各コースの目的に沿って計画的に整備され、実施されている。</p>
8	愛知教育大学	27	<p>ほとんどの科目が研究者教員と実務家教員との協働により進められ、教育現場の課題に即した多様な方法により、授業が進められている。実践的力量形成を意識した教育が行われていると評価できる。共通科目では最大50人による授業もあるが、複数教員の下でグループ別の課題演習を行うなどの工夫がなされている。<u>学部新卒学生と現職教員学生との関係も良好であり、共に同じ授業を履修することにより、相互に良い学び</u>となっている。</p>

表において、授業方法には波線を、現職教員学生と学部新卒学生との学び合いについては実線を付した。下線に着目すると、両者が協働しながら双方の特長を生かし合える取組が展開されていることが読み取れる。しかし、両者が共に学び合うことへの必然性に関する記述内容は乏しく、途上段階にある。そこで両者が共に学び合うことがもたらす教育効果について、具体的な実践を通して明らかにすることが重要である。先に述べた加治佐（2016）を実証するために、本研究では「道徳教育の理論と実践」における模擬授業づくりを通して、現職教員学生及び学部新卒学生の学び合いによる成長を追うことにする。

## 2. 道徳教育の理論と実践A & Bの合同授業の開発

### 2-1 目的

本授業実践を通して、現職教員学生と学部新卒学生とが協働し合い模擬授業づくりに取り組み、現職教員学生は若手教員への効果的な指導のあり方を学び、学部新卒学生は現職教員から経験値を踏まえた指導を受

ける。両者が互いを必要とする関係性を生かしながらグループ学習に取り組み、一人一人が参画意識もって臨むことで、同僚性の体得をめざす。

## 2-2 方法

本授業実践を、本学大学院教育学研究科教職実践高度化専攻の学生を対象に、「道徳の理論と実践A（現職教員学生対象）」及び「道徳教育の理論と実践B（学部新卒学生対象）」において、2016年11月から12月にかけて実施した。なおガイダンスを11月初旬に行い、その後の1か月を準備期間に充て、グループ毎に準備計画を作成のうえ実践し、模擬授業の実施を12月より開始した。

## 2-3 内容

本研究では、教職大学院において現職教員学生と学部新卒学生とが共に学び、協働し合う授業を開発した。両者が模擬授業づくりに参画し、双方の到達目標を目指した取組をグループ毎に実践する。グループは約4名（現職教員学生2名、学部新卒学生2名）とし、小学校と中学校とに分けて編成した。

ガイダンスを行い、その後グループ毎に準備をし、模擬授業に備える。およそ1か月間に渡る準備に関わる取組については、計画書の提出を課すのみとし、各グループの主体性に任せた。

本実践を通じた教育効果については、①教材の選択、②授業づくり、③模擬授業の実践、④振り返り、⑤改善プランの作成及び発表、の全てのプロセスにおいて、振り返りシートへの自由記述を参考にする。また指導者（本授業担当者）が、学生の授業に取り組む姿勢などを観察するとともに、事後の聞き取りによる情報をも加味する。

なお振り返りシートの設問内容については、以下の通りである。

現職教員には、①指導できた内容、②指導しやすい内容、③指導に苦心した内容、④学部新卒学生の意欲を高めるために工夫したこと、の4点を課した。また学部新卒学生に対しては、①理解できた内容、②理解しやすい内容、③理解しづらい内容、④現職教員学生から指導を受けて、効果的であると感じ受け止めた内容、の4点を課した。

## 2-4 結果

全ての現職教員学生及び学部新卒学生とが、グループ毎に協働し合いながら模擬授業に向けた準備を行い、授業実践に取り組む姿を見とることができた。また振り返りで出された意見を踏まえた授業改善案の作成については、指導者からの周知を含めて、今後に向けた課題を若干か残した。

以下の表2、表3、表4、表5は、模擬授業の準備に取り組んだ際に実施した振り返りシートへの自由記述の一部を整理したものである。

表2 振り返りシートへの自由記述（指導できたこと：現職教員学生）

学生	指導できた内容（道徳の時間に関わること）
C1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・道徳的实践に繋げるための手だてとしての仕掛け。</li> <li>・道徳的価値を児童に気づかせ、身に付けさせるための発問・活動など。</li> <li>・児童に考えさせるための手だて。</li> <li>・授業の仕掛けは大切であるが、ねらい（価値項目）を達成することが最優先であること。</li> </ul>
C2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・道徳的価値に関する内容の提示の仕方について。</li> <li>・登場人物への自我関与について。</li> <li>・教師の主発問について。</li> <li>・振り返りやまとめの仕方について。</li> </ul>
C3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・指導案における「ねらう価値」と指導観・教材観との関わりについて。</li> <li>・事後指導の工夫について。</li> <li>・補助資料活用の仕方やその必要性について。</li> </ul>
C4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・導入、展開、終末の導入は良かったので、展開以降の流れの作り方、中心発問はどのようなものがよいかを考えたこと。</li> <li>・役割演技は条件を設定しつつも、即興で行うことに意味があること。</li> </ul>

C5	<ul style="list-style-type: none"> <li>・指導案に対する助言（中心発問の検討・文言について等）。</li> <li>・ロールプレイの内容に関するアイディア。</li> </ul>
C6	<ul style="list-style-type: none"> <li>・道徳の指導案作成に取り組む姿勢・意識について。</li> <li>・今後の道徳の流れから、今回は「読み物資料」としての道徳ではなく、「<u>体験的な学習</u>」や「<u>問題解決的な学習</u>」にチャレンジし、提案性のある授業に臨むよう指導した。新採として採用された際は、この経験を生かした授業提案をするよう指導した。</li> </ul>
C7	<ul style="list-style-type: none"> <li>・道徳の授業でめざしたいことは、道徳的価値を教え込むのではなく、道徳的実践力を育むこと。</li> <li>・役割演技を用いるなど、提案性を指導案に加えること。</li> <li>・登場人物の心情理解ではなく、いかに自己との関わりを持たせられるかということ。</li> <li>・学習プリントについて。</li> </ul>

表3 振り返りシートへの自由記述（理解できたこと：学部新卒学生）

学生	理解できた内容（道徳の時間に関わること）
C8	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文章での読み方においてどちらの側の視点に立つ必要があるのか、また取りあげる場面は少なくし、児童が困惑しないように設定する。</li> </ul>
C9	<ul style="list-style-type: none"> <li>・道徳的実践意欲に繋げていくためには、ロールプレイを取り入れることも有効である。</li> </ul>
C10	<ul style="list-style-type: none"> <li>・なぜその教材を取りあげるのか。</li> </ul>
C11	<ul style="list-style-type: none"> <li>・その立場の人にならないと実際には分からないこともある。</li> </ul>
C12	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ジレンマを感じる、葛藤場面を中心に持ってくる。</li> <li>・<u>学校生活で見えること（ロッカーの整理をする、スリッパを揃えるなど）を今後の目標とさせることで、評価がしやすく、子供たちの意識に繋がりがやすい。</u></li> </ul>

表4 振り返りシートへの自由記述（学部新卒学生の意欲を高めるために工夫したこと：現職教員学生）

学生	指導できた内容（道徳の時間に関わること）
C1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・<u>具体的な展開例</u>をそれぞれの院生が表現できるようにする。</li> <li>・<u>活動の具体例</u>を示す（ロールプレイ、葛藤場面、ワークシート、教具の工夫など）。</li> <li>・実際に実習校での実践（実施のすすめ）。</li> </ul>
C2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実際に実習先で授業を行うという設定にしたこと。</li> </ul>
C3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教材文の選び方やねらいの設定について、実習校の先生としっかり相談するように伝えたこと（授業者もその方が自信をもって準備できるし、現場にとっても有意義なものになると考えました）。</li> <li>・基本的に「<u>認め</u>」、その上で<u>改善点等</u>を示した（少なくとも私の若い頃よりはよく書けていたというのがあります）。</li> </ul>
C4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校実習で得た経験をもとに導入を考えることができるようにしたこと。</li> <li>・役割演技など、<u>ストマスが楽しみながら授業に参加できるように流れを工夫</u>したこと。</li> </ul>
C5	<ul style="list-style-type: none"> <li>・指導案に対する助言の時に、<u>良い点をしっかり評価</u>。</li> <li>・指導案検討会において、意見交換を行う際、<u>ストマスの人の意見を真剣に聞き、自分も真剣に発言</u>しました。</li> </ul>
C6	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今取り組んでいることの価値について説明した。</li> <li>・<u>今の学習が採用後どんなふう活かされていくのかについて説明し、モチベーションアップを図った。</u></li> <li>・3人とも思いをもって指導案作成をしており（1回目の検討会）、指導案そのものは未熟だが、<u>そういった思いをもって臨む姿勢は素晴らしいと伝えた。</u></li> </ul>
C7	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自らが「<u>やりたい</u>」と思うことを自ら選択させること。</li> <li>・学生が<u>作成した指導案を認める</u>こと。</li> </ul>

表5 振り返りシートへの自由記述（現職教員からの指導を通して効果的であったこと：学部新卒学生）

学生	理解できた内容（道徳の時間に関わること）
C8	・小学校組は3人の先生方から指導していただきました。それぞれの先生方の意見を聞くことができ、導入の仕方であっても先生によってかわり、めあてを授業で言わずに児童に発問を投げかけ、先生に好まれそうな意見だけを児童に言われたいような手だてをしたり、めあてを児童と共有して授業を進めていったりと、それぞれの意見で授業が広がり深まっていくということを感じることができた。それぞれの先生方が違った意見が出るが、唯一同じであったのは、終末部分で教師側で今まで出た意見をまとめあげて狭めるのではなく、道徳では、これからの生活にも繋げていけるよう広く考えを持たせていく必要がある。
C9	・自分たちだけでは、「」道徳的な実践に繋げていく」段階まで行くための方法が思いつかなかったが、先生方のアドバイスを受けて、新たな手法を知ることができた。
C10	・現場での様子や、自分の経験を話してくれたので、イメージしやすかった。 ・自分たちでは、中心発問からどうやって授業を展開するのか悩んだが、読み物からどう離れていくのか、その方法もロールプレイという方法だけであるが学ぶことができた。
C11	・道徳の授業に関する現職の先生方の失敗談が聞いたこと。
C12	・具体的な葛藤について、実際の生徒の様子、経験から考えていただけたので、非常に納得しやすかった。

### 3. 授業実践を通じた教育効果

#### 3-1 共に学び合うことがもたらすもの

現職教員学生と学部新卒学生とが協働し学ぶ合うスタイルが教育効果を高めるのは、両者が互いに相手を必要とする場合であるといえる。本取組を通して現職教員学生は、若手教員の指導はもとより同じ目標の実現に向け、共に取り組むことを通して同僚性のあり方をも体得できた。一方学部新卒学生にとっては、キャリアを積みあげた先輩教員から経験値を踏まえた指導を受け、授業づくりのいろはを学ぶと同時に、教員としての心構えについても理解を深めることができた。ただし、合間で授業を展開する場合、指導者（本授業担当者）は、取組のねらいを明確にしたうえで到達目標を掲げ、ガイダンスを徹底した後は、グループ活動による能動的な学びの姿を見守ることが肝要である。そして適宜、学生とのコミュニケーションを緻密に行い、取組に対するモチベーションの維持、向上に努めたい。



図1 協働し合うグループ活動のようす

ここで振り返りシートの自由記述に基づき、共に学び合うことの意義について考察を進める。現職教員学生の指導に関わる強い思いと学部新卒学生の受け止め方や学びの内容に着目すると、合致するものと齟齬をきたすものとが混在している。ただしグループ活動での双方のやりとりの様子を見る限りにおいて、学部新卒学生の学びの姿が能動的であったことは明らかである。つまり現職教員学生がスクールリーダーとしての自覚をもって、これまでの経験を踏まえた指導を展開することができたと捉える。経験を誠実に吐露する姿勢は、後輩への強いメッセージとして伝わり、心をゆさぶり、これから教壇に立つうえでの心構えとして理解できたのではないだろうか。

前節の表2は、現職教員学生が学部新卒学生に対して、指導できた内容を整理したものである。全ての学生が、道徳の時間の授業づくりの基礎基本に関わる内容について、それぞれの経験に基づき具体的な指導ができていることが読み取れる。またC6の下線部分からは、新たに道徳科が始まるからこそ、将来を見据えつつ教員としての力量を高める挑戦者であって欲しいとの願いのもと、学部新卒学生のモチベーションを鼓舞するような指導も展開されていることが分かる。

前節の表3は、学部新卒学生が現職教員学生からの指導を通して理解した内容を整理したものである。一見すると記述量が少なく、現職教員学生からの指導が十分に行き届いていないとも解釈できる。しかし学部新卒学生が抱く理解することへのものさしを斟酌すれば、道徳教育への学びを始めたに等しい状態であり、こうした状況は当然とも理解できる。このことは前節の表5（「現職教員からの指導を通して効果的である

と受け止めたこと」)の全ての学部新卒学生の記述内容からも明らかである。現職教員学生と学部新卒学生とが、同じテーブルに着き、同じ課題に取り組むことで闊達なコミュニケーションを反芻し、双方がそれぞれの到達目標に近づくための試行錯誤が展開されたと考える。

前節の表4は、現職教員学生が学部新卒学生の意欲を高めるために工夫した内容を整理したものである。波線部分に着目すると、現職教員学生が学びの成果に基づき具体例を示しながら、誠実に学部新卒学生への指導に邁進している様子が読み取れる。理論を踏まえた実践のあり方については、実践者である現職教員であるからこそ理解できており、伝授するに叶うものでもある。また下線部分は、現職教員学生が、学部新卒学生の学ぶ姿勢をきちんと受け止め、的確に評価できていることが分かる。学部新卒学生の力量をおおむね掌握したうえで、少しだけレベルを高めて取り組む指導を、自らの経験に基づきながら展開できている。さらに二重下線部分は、現職教員学生が、学部新卒学生の能動的な取組を促す指導を意図的に行っていることを示している。若手教員の育成については、懇切丁寧な指導が必要である反面、主体的な学びを促すような関わりの重要性を認識したうえで、同僚性の果たす役割を熟知したうえで指導にあたりたい。こうした観点に立ちながら、現職教員学生が学部新卒学生の指導にあたることにより、両者がそれぞれの立場において成長を遂げていると考える。

### 3-2 見いだされた課題とその改善

教職大学院が始まり、初めて本取組を実践し、指導者(本授業担当者)がねらいに定めた到達目標に近づけたと考える。しかし現職教員学生がやや前のめりに指導にあたったことから、学部新卒学生の道德教育に関する基礎基本の力量がやや不足していることが浮き彫りとなった。それでも学部新卒学生が、自らの力量を高めようという意識を向上させることで、現職教員からの指導が効果的に噛み合い機能したとも受け止められる。

何れのグループも、役割演技を道德の時間の授業案に組み入れる視点に立った話合いが展開された。「特別の教科 道德」が完全実施される平成30年(小学校)、平成31年(中学校)に向けて、質の高い指導方法として体験的な学習が取りあげられ、その一例として役割演技が示され、多様な形で授業への導入が求められている。既に現職教員学生に対しては、「道德の理論と実践A」の授業において、役割演技についてその特長、活用の仕方、教育効果、そして活用するうえでの留意点などについて、本取組の開始前に解説などを済ませている。授業時に関心の高さは見受けられたものの、既に役割演技を組み入れた授業研究を進めている現職教員学生を先頭に、個々の理解度にやや長く幅が見られることが課題として残された。授業を通して一定の水準にまで引きあげることができるものの、実地経験を伴うことで気づける内容も多く、現職教員に対する支援について再検討する必要がある。

現職教員学生の指導内容を見てみると、道德教育の基礎基本に関わる具体的な内容、自らの経験値を踏まえつつ望ましい教員としての構え、そして学部新卒学生の意欲を高めるための評価と関係性について、バランスよく取り組んでいる。おおむね現職教員学生2名と学部新卒学生2名とでグループを編成しており、それぞれが自らの視点にたった発言を交わすことで熟議がもたらされる。そのとき仮に一方の現職教員学生の意見が強調されたとしても、別の現職教員学生がそのことを受け止めてコメントすることによって平衡を保つことができる。また学部新卒学生にとっても、一つの事例について多面的多角的な捉え方に出会うことで、より視野を広げることができる。現職教員学生から学部新卒学生への指導内容については、決して一方的な流れにするのではなく、疑問を抱きつつその解決を図りながら進めていくことが求められる。このことは事前のガイダンスの際に、教育効果を高めるうえでも指導徹底を図ることが重要である。

本取組の実施にあたっては、グループ毎に話し合い、準備・授業実践・改善プラン作成までの実施計画を作成した。授業者は学部新卒学生であることから、可能な範囲で学校実習校での実践を含めて検討された。学部新卒学生のそれぞれが道德の時間の指導案を作成し、検討会では全てを精査したうえで一つに絞り込んだ。本来ならば全員に模擬授業者として活躍して欲しいところであるが、代表者が行うスタイルをとった。グループによっては、授業者を複数体制にして取り組む場合も見られた。代表者を決めるとその人任せになりがちになることも危惧したが、事前に計画表を作成していたことや指導者(授業担当者)が予め模擬授業実施前に打合せを行うことにより、構成員の全てが何らかの役割を担当し責任をもって取り組めたことから、その心配は杞憂に終わった。図2に実施計画表の一例を示しているが、構成員全員が集合できる機会が、教育課程の編成上困難であることが判明し、今後改善を加える必要が出てきた。

◇◆道徳教育の理論と実践、準備・実施・改善デザイン作成計画◆◇

グループ(小学校) )、メンバー(A, B, C, D, E)

月	内容、ほか	日時・場所・時間	担当者	備考
11	・実習校で「わたしたちの道徳」「副読本」をかき写す	11/10 3時15分	A, B	・コピーも人数分確保する。
	・772の更新から扱う教材を決める	11/10 3時	A, B	各実習校の先生とも相談
	・指導案(総案) 第1回 検訂	11/17 5:30	全員	必ず完成型と準備
	・指導案の手直し		A, B	
	・教具準備 7-72シート作成		"	指導案は修正後 全メンバーにメール (教具等も 写す予定)
	・70レ授業	11/24 10:00~ 12年生	全メンバー	
12	・最終打ち合わせ	12/1 全体4 12年生		
	・模擬授業Ⅱ	12/14	授業者( ) 観覧(C) 記録(D) 記録(E)	
	・分析・検訂・改善 通話(授業者外) 分析・改善(授業者)	12/8授業後 → 12/15に持参		2016年中に必ず提出(目標 12/22)
2017.1				

図2 模擬授業の実践に向けた実施計画表

## おわりに

教職大学院において、現職教員学生と学部新卒学生とが学びの場を共有する場合、教育効果を見据えて授業計画を構成する必要がある。両者は授業へのニーズが異なることから、共学することで教育効果を引き下げられる場合もある。であるがゆえに、両者が相手を必要とする授業内容を構成することにより、共学することの意義が芽生える。

本研究では、「道徳の理論と実践A（現職教員学生対象）」と「道徳の理論と実践B（学部新卒学生対象）」を対象に、授業づくりとその実践を題材にすることで、両者をジョイントさせる意義を見出した。現職教員学生は、スクールリーダーとしての資質能力の向上をめざし若手教員への指導のあり方を学ぶことができる。加えてグループでの取り組みを通して、同僚性を高める手だてについても実践できる。一方、学部新卒学生にとっても、経験値が豊富な先輩教員からの学びを通して、同一の課題にチームで取り組むことの意義を体得することができる。

機構が示している「教育課程を展開するにふさわしい授業内容、授業方法・形態」に着目し、現職教員学生と学部新卒学生とが協働し学び合う授業について、本取組では4時間を充てることで一定の教育効果を見出す手懸りを得ることができた。そのためには現職教員学生と学部新卒学生が、互いを必要とする授業内容が何であるのかを精査し、緻密な実施計画のもとで実践していくことが求められる。また常に学生の能動的な学びを支援し、その取り組む姿勢や成果物を評価することで、より高みをめざすモチベーションを維持できると考えられる。指導者（授業担当者）は学生とのコミュニケーションに努め、ニーズを押し量りながらそれに応えることで信頼関係が構築され、必要とされる存在として位置づけられる。授業を創りあげていく視点に立つと、学生の主体性を尊ぶスタイルが望ましい授業形態であると考えられる。

成果が見られる一方で課題も見出された。本取組を機能させるためには、より緻密なガイダンスが求められる。学生の能動的な学びを引き出すうえで、一人一人が目的意識をもって臨まなければ、それは受け身的な学びと化し、ただ取組をこなしているに過ぎなくなる。両者がそれぞれの目的の実現に向けて、双方の存在に敬意を抱きながら、同じ課題に取り組む所に取組の肝があることを、指導者（授業担当者）は戒めなければならない。今回の実践では、学生の学びに対する姿勢に助けられたと判断される部分もあることから、今後は学生が自らの到達目標を意識しながら取り組めるよう改善を加えたい。

本取組の集約については現在、模擬授業の準備に向けグループ活動による協働し学び合う取組までである。模擬授業、振り返り、授業改善プランの作成についての分析・検討結果については、改めて今後整理し考察を加えて報告することにする。

## 参考文献

- 愛知教育大学：『愛知教育大学大学院教育実践研究科教職実践専攻 認証評価結果』，一般財団法人教員養成評価機構，2016.
- 福井大学：『福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻 認証評価結果』，一般財団法人教員養成評価機構，2016.
- 兵庫教育大学：『兵庫教育大学大学院教育学研究科教職実践高度化専攻 認証評価結果』，一般財団法人教員養成評価機構，2016.
- 池田いくみ：「教職大学院における“新たな学び”の実際～教職大学院に何を求め、何を学んだか～」  
『Synapse 4・5月号』，株式会社ジアース教育新社，20-23，2016.
- 一般財団法人教員養成評価機構：『教職大学院評価基準』，2014.
- 可知良之：「余裕がないなかでも若手を育て上げる工夫」『月刊教職研修 2015-4』，教育開発研究所，21-23，2015.
- 加治佐哲也：「教員養成改革の方向性をどう捉えるか～教員の資質向上に大学はどこまで貢献できるか～」  
『Synapse 4・5月号』，株式会社ジアース教育新社，5-13，2016.
- 木村元：『学校の戦後史』，岩波書店，2015.
- 宮崎大学：『宮崎大学大学院教育学研究科教職実践開発専攻 認証評価結果』，一般財団法人教員養成評価機構，2013.
- 中央教育審議会：「教職大学院制度の創設」『今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）』，文部科学省，2006.
- 大脇康弘：「中堅層にリーダー経験を積ませる」『月刊教職研修 2015-4』，教育開発研究所，24-25，2015.
- 岡山大学：『岡山大学大学院教育学研究科教職実践専攻 認証評価結果』，一般財団法人教員養成評価機構，2013.
- 聖徳大学：『聖徳大学大学院教職研究科教職実践専攻 認証評価結果』，一般財団法人教員養成評価機構，2014.
- 初等中等教育局教職員課教員免許企画室：『教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会（第2回）議事要旨』，文部科学省，2016.
- 東京学芸大学：『東京学芸大学大学院教育学研究科教職実践創成専攻 認証評価結果』，一般財団法人教員養成評価機構，2013.
- 山下恭徳：「教員免許法改正、再課程認定、教職課程コアカリキュラムの検討状況について」，日本教育大学協会学長・学部長等連絡協議会，2016.  
『Synapse 4・5月号』，株式会社ジアース教育新社，20-23，2016.
- 山梨大学：『山梨大学大学院教育学研究科教職実践創成専攻 認証評価結果』，一般財団法人教員養成評価機構，2014.